美濃路

美濃路は、江戸時代、東海道宮の宿（熱田区）と中山道垂井宿（岐阜県垂井町）をつないだ道です。東海道から分かれて美濃へ向かう街道なので、「美濃路」あるいは「美濃街道」と呼ばれました。全長58.7㎞。この間に清須宿、稲葉宿、萩原宿、起宿、墨俣宿、大垣宿の六宿（名古屋を入れて七宿ともいう）がありました。この地域の美濃路は清須越（きよすごし）の際、現在の位置に定められ、道中奉行の支配下に置かれました。江戸と京、大坂を結ぶ東海道、中山道が最も重要な役割を果たしましたが、東海道には「七里の渡し」と「鈴鹿峠」、中山道には「木曽路」などの難所があったため、東海道～美濃路～中山道の道のりがよく利用されました。

また、信長の桶狭間の戦い、秀吉の小田原征伐、家康も関ヶ原の戦いで凱旋し、美濃路は「吉例街道」と言われるようになりました。

美濃路筋の白山神社前には、“立場（たちば）”と呼ばれる旅人や人足衆の休憩所があり、そこでは付近の人たちが“おこし”や“あられ”を売っていました。慶長15年（1610）の名古屋城築城当時には、石運びに従事した人たちが間食として美濃路街道筋で駄菓子を買い求めました。

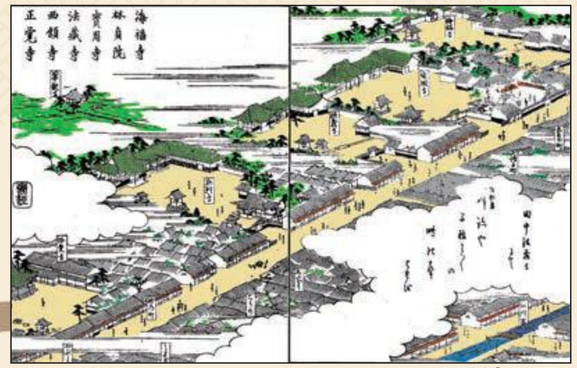
美濃路全体之図

「尾張名所団扇絵」より
所蔵：名古屋市博物館

尾張名所団扇絵「榎権現祭礼」には、江戸時代の榎白山神社の賑わいの様子が描かれています。
「尾張名所団扇絵」より　所蔵：名古屋市博物館

美濃路案内板

絵図や古地図を掲載した案内板が、西区内の美濃路に合計8基設置されています。設置場所にちなんだ内容となっていますので、ぜひ歩いてご覧ください。


参考「尾張名所図会」

名古屋城下には三カ所の大木戸があり、そのうち二カ所は美濃路にありました。大木戸の周辺には寺町が配され、城下防御や治安の役割を担い、夜間は閉ざされていました。

「尾張名所図会」より　所蔵：名古屋市博物館

円頓寺（えんどんじ）

承応3年（1654）創建、享保9年（1724）に今の地に移りました。本堂は名古屋城天守閣使用の余材を拝領して建てたといわれ、本堂脇には藩祖義直の側室が寄進した鬼子母神像が安置されています。

慶栄寺

境内にある太子堂は奈良の元興寺五重塔の古材で建てられ、聖徳太子像が祭られています。松涛庵（しょうとうあん）は足利義政が銀閣寺を建てたとき、茶室として造らせたものを京都東山より移築したといわれています。

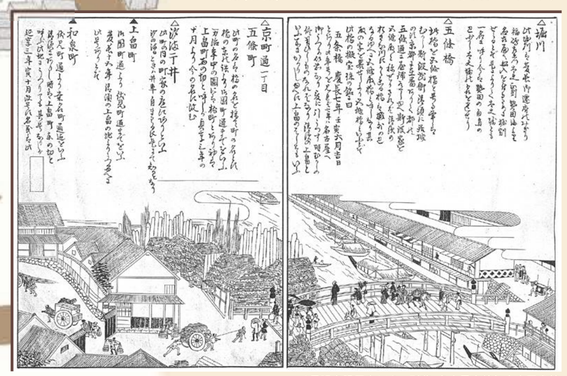
枇杷島橋が架かる庄内川には、かつては中島があり、川の東西に中島を中継して二つの橋が架かっていました。枇杷島橋は檜材だけを使った大橋で、眺望も素晴らしかったため、多くの人々が往来する名古屋の名所でした。

古来、街道が発展しても、軍事上の目的により河川に橋を架けることはほとんどありませんでしたが、元和8年（1622）に架けられた枇杷島橋は、その例外であったといえます。

枇杷島橋が架けられたことにより、通行は一層便利になり、枇杷島にあった青物市場は繁栄を極め、特に西区内を横切る街道は城下町と青物市場を結び、往来が盛んであったようです。

浅間神社

五条橋界隈を北から南へ俯瞰した図です。
材木屋が並ぶ川の東側（左側）には京町筋が延び、川の西側（右側）は大船町の筋、さらに右側が四間道になります。


「尾張名陽図会」より　所蔵：名古屋市鶴舞中央図書館

参考「尾張名所図会」

土蔵を連ねた四間道の様子が描かれています。四間道に建ち並ぶ土蔵の眺めは、

「塩町うらから納屋うらまで拾五町余の間、白壁の土蔵には浪花者も舌を巻き、碁盤割の町中に総格子の無商売多くて豊かに暮らすを見ては江戸っ子もきもをつぶして尻ごみなす。」

『天保見聞名府太平鑑』天保期（1840年頃）

と表現されています。

四間道